

## むずかしい遺産分け

むかし、さばくに、年よりのベドウィンがいて、息子が三人ありました。この父親は、みごとにラクダを十七頭持つていました。

父親は、自分の死ぬ時が近づいたのを知ると、息子たちをよびよせていいました。

「長男よ、おまえに、わたしのラクダの半分を遺産として残すことにしよう。次男よ、おまえには、わたしのラクダの三分の一をあたえよう。三男よ、おまえにはラクダの九分の一をあたえよう」

まもなく父親はなくなりました。息子たちは、父親の遺言にしたがって、ラクダを分けることにしました。ところが、どんなに頭をひねっても、遺言通りに分けることができません。兄弟は、ずいぶんはげしいいさかいをつづけることになりました。

ある日のこと、ひとりのかしこい老人がラクダに乗ってやってきました。老人がテントのそばを通りかかったとき、兄弟は、よびとめていいました。

「わたしたちは、いま、遺産分けでとてもこまっています。どう考えてもうまくいかないんです。どうか知恵をおかしくくださいませんか」

かしこい老人は、三人から話を聞くといいました。

「わしのラクダも、おまえたちのラクダといっしょに数えてごらん。そうすれば、きつとうまく分けられるから」

老人のラクダをいっしょに数えると、ラクダは十八頭になります。するとまあ、どうでしょう。兄弟は、父親の遺言通りに遺産をうまく分けることができたのです。

つまり、長男が半分の九頭をもらい、次男は三分の一の六頭をもらい、三男は九分の一の二頭をもらったのです。

そうして分けてみると、ラクダが一頭だけ残りました。かしこい老人は、そのラクダをひざまずかせて、ひよいとせなかにとびのると、どこへともなく行ってしまいましたとや。

原話：『世界のメルヒェン図書館9』小澤俊夫訳／ぎょうせい刊

再話：村上郁

ベドウィン さばくを移動しながらくらすアラブ人

